

オロスコの反乱

マデロはメキシコ史上最も自由な選挙で大統領に就任した。様々な問題を抱えながら十五ヶ月に亘って政権の座にあったのは、まるで奇跡のようであった。反対分子の混じった、不安定で無能な内閣、上院は依然としてディアスの時と同じ顔ぶれで、マデロの改革案に頑強に反対した。1912年の下院はマデロ派が多数を占めたが、反政府的発言に終始した。政敵やサパタ以外にマデロは三つの深刻な叛乱に直面した。反乱者はベルナルド・レイェス、パスクアル・オロスコ、フェリス・ディアスである。1911年12月14日、レイェスはアメリカから侵入して政府転覆を試みたが、彼の思惑に反し、誰も支持する者はいなかった。ディアス時代の北部司令官はヌエボ・レオン州リナレスで逮捕された。ディアスであれば即刻銃殺したであろうが、マデロは彼をメキシコ市のサンチャゴ・トゥラテロルコ刑務所に閉じ込めた。⁸⁴

上流社会との和解を求めるマデロがチワワ州議会にも影響を及ぼした。マデロは国政選挙が行われるまで、ディアスが任命した州議会を温存しようとして、ディアスが任命した知事アウマダの辞任を求めず、アブラム・ゴンザレスを臨時州知事にしようとしなかった。テラサス＝クレエル一族は懸命にゴンザレスがチワワ州知事になるのを妨害した。彼等はゴンザレスの買収に失敗すると、革命軍の下部組織と連携する事にした。革命軍が州都に進軍を始めて、やっとアウマダは退き、州議会はゴンザレスを知事に任命した。しかし、ディアス時代の権力者たちはそのまま残った。ゴンザレスは暫定知事を務めながら立候補し、1911年8月、チワワ州知事に選ばれた。⁸⁵

ゴンザレスがチワワでの改革政策を打ち出そうとすると、マデロに釘を刺され、ゴンザレスの政治力はそのたびに弱められていった。マデロに対する信頼や友情が薄れつつあった11月、ゴンザレスはメキシコ政府の中で最も重要なポストである内務相として閣僚に加わるようマデロから招待を受けた。ゴンザレスは何度も断った末引き受けた。彼は知事の座を手放したくなかったので、議会に欠勤扱いとすることを求め了承を受け、十年ほど前ルイス・テラサスがやったように代理の知事、アウレリアノ・ゴンザレス（血縁者ではない）をたてた。それ以来、何事にも消極的な州政府の態度に乗じ、テラサス＝クレエル一族は力を取り戻し、政治的に最も人気のあるオロスコを味方に引き入れることに成功し、反革命運動を企んだ。⁸⁶

メキシコの他の地域の人々はチワワの革命家たちの動きを、狂気の沙汰であると思っていった。最初の二ヶ月間チワワ革命軍は、誰にも頼らずに戦い、ディアス政権の脆さを露呈した。他の地域で蜂起があった時には、チワワ革命軍は決定的な勝利を遂げていた。1911年6月、チワワ市に凱旋した革命軍を数千の人々が歓呼で迎えた。多くの革命兵士にとって、それは長い戦いの後に得た最後の勝利であった。その僅か数日後、マデロと彼が任命した知事アブラム・ゴンザレスは大掛かりな革命軍の除隊と武装解除を開始した。僅かばかりのルラーレを残した大部分の兵士は一人五十ペソのボーナスと汽車の切符を渡さ

れ、故郷に追い返された。更にライフルを放棄したものには二十五ペソが支払われた。僅かばかりの品が戦没者の遺族と負傷者に渡された。⁸⁷

チワワから不穏な動きや反乱のニュースが増え、翌年二月、アブラム・ゴンザレスは内務長官を辞してチワワ州知事の席に戻った。この月チワワでは一連の暴動と農民の反乱が発生した。2月27日にはフアレス市の駐屯部隊が反乱を起し、町を占拠し、新しい局面を迎えた。中には自称PLMやサパティスタがいた、しかしリーダー格はエンリケ・バスケス・ゴメスである。彼はディアス再選のときマデロの副大統領候補であったフランシスコ・バスケス・ゴメスの弟である。反乱に加わった者の殆どはオロスコが加われば彼に従う事を表明していた。反乱はオロスコが始めたものではなかったし、彼がこの時点で政府に反抗する準備が出来ていたかはわからない。マデロはオロスコが忠誠を保ってくれる事を願い、チワワ州知事の座を提供したが、オロスコはこれを断った。オロスコの真意が何処にあったのか、諸説があり、はっきりとしていない。マデロがオロスコにフアレス奪回を指示した3月2日、彼はルラーレの隊長を辞し、革命の再開を宣言した。⁸⁸

オロスコはエミリオ・バスケス・ゴメスとの関係を絶って、自らを最高指揮官とし、数日後エンパカドラ計画を発表してもう一度メキシコ人に蜂起を促した。腐敗した独裁者に成り下がり、1910年から翌年の革命で掲げた全ての約束を反故にし、闕った農民のために農業改革をやろうとしないマデロを糾弾した。この急進的なプログラムはエミリアノ・サパタの賛同を得、PLMが実情調査に送り込んだファン・サラビアは、「正真正銘のリベラル」である、と報告した。一方、チワワのアシエンダ所有者たちは揃ってオロスコを支持し、百二十万ペソの支援をした。チワワの支配者層と繋がりが出来たオロスコは、闊達な資金を利用し、当時では破格な日給二ペソで傭兵を確保した。オロスコが1910年には農民と組み、二年後支配層と結んだのは、彼自身が絶えず権力を握ろうとしていたことの証であった。⁸⁹

1911年5月フアレスにおける勝利の後、マデロがナバロを軍法会議にかけることなく釈放したことで、パンチョ・ビヤが謀反を起そうとしたのにはもう一つの理由があった。彼の兵士は報酬を受けていなかった。チワワ条約が締結されてから間もなく、ビヤの兵士たちはアブラム・ゴンザレスを訪ね、勝利の後に得られるはずの土地は何時もらえるのかを問うた。ゴンザレスは、土地を分配する前に法案を起草する必要がある、暫く時間がかかる旨回答した。ゴンザレス知事の回答に不満を抱いた兵士たちはビヤに会いに行った。ビヤは一同に伴って再びゴンザレスを訪ね、土地の事を問い質したが、ゴンザレスは暫くの忍耐を要求した。ビヤの兵士たちは我慢するしかなかった。ビヤは別な手段を用い、テラスの農園やアシエンダから金品の強制取立てをして兵士に分配した。⁹⁰

テラスはビヤを槍玉に挙げ、マデロとゴンザレスも強制取立てを取り締まったので、ビヤは政府に圧力をかけるため1911年8月、メキシコ市へ出かけて兵士のために支払い

を要求した。その結果財務相がゴンザレスに支払いを許可し、ビヤの兵士はやっと給金を受け取る事が出来た。戦没者の家族には支払いがなく、ビヤは自費で三家族を援助した。

91

マデロ革命に加担した軍関係者には、政治的あるいは軍事的ポストが与えられていた。ビヤが長く住んでいた町パラルには州兵隊長ホセ・デ・ルス・ソトがいた。彼は1860年代にフランス軍と戦い、1876年のディアスの反乱に加担し、そして今度の革命では独裁者に反抗した。彼はビヤを危険人物として警戒していた。ビヤが元の兵士を庇おうとするたびに両者の間で争いがエスカレートし、ビヤの部下三人がソトに殺される事態に至った。ゴンザレスがビヤを特別扱いしていることをソトが激しく非難したため、ゴンザレスは態度を変えた。知事の支持を得られないビヤはマデロに文書で抗議した。折からチワワでマデロ＝ゴンザレスに対する反乱が発生し、マデロとゴンザレスは両者の力を必要としていたため、対応に苦慮した。マデロは友好的ではあったが曖昧な返事をしてビヤを宥めようとしたため、ビヤはそれに反発して1912年2月15日、コレオ・デ・チワワ紙に公開状を発表してチワワ市民に訴えた。⁹²

ビヤから受けた抗議や公開状で、マデロとゴンザレスはビヤの忠誠心に疑問を抱いた。ビヤが政府に対して反乱を起すとの噂はチワワ中に広まり、アメリカ捜査局（FBIの前身）にも伝わっていた。この時点でオロスコは未だ反乱に加わっていなかった。ゴンザレスはビヤとオロスコが謀議を重ねているとの噂を耳にしていた。ビヤによると、オロスコは父親を介してビヤの買収を謀った。一方、当時の言い伝えや歴史家は、ビヤはオロスコに加わろうとしたが、山賊であるが故に断られたことになっている。ビヤを信用して民兵を指揮させ、オロスコ征伐にあてるべきか、ゴンザレスは悩んだ。与えた武器や軍資金を反政府運動に使用される恐れがあった。しかし、もしビヤを援助しなければ、敵方へ追いやる結果になると判断したマデロは、ビヤに民兵九百人分、千五百ペソを与えることをゴンザレスに指示した。ゴンザレスは万一のことを考えて二百五十人に減らし、ビヤを大佐に任命した。マデロやゴンザレスとは意見の相違があったにもかかわらず、ビヤは再びマデロのために銃を握った。1912年2月末、ビヤと彼の兵士たちは、独裁者ディアスを転覆させた勢力の中心地であったチワワ州西部の山岳地帯に再び本拠地を構えた。⁹³

1912年3月2日、マデロからフアレス市を占領しているバスケス・ゴメスの反乱軍を制圧するよう命を受けたオロスコは、これを拒否して退任した。彼が反乱に加わる事は明らかであった。チワワに連邦軍はなく、元革命兵士で武装しているものは全てオロスコの配下にあった。ゴンザレスはビヤにフアレスに入る事を命じ、忠誠を誓う手持ちの兵を配下に付けることを約束した。ビヤがフアレスに向かっていることは、オロスコに恰好な口実を与え、彼は反政府側に加わった。オロスコの反乱軍はビヤ軍を押し返した。ビヤはサラゴサ溪谷へ撤収し三月末まで傍観していた。反政府運動はチワワからドゥランゴ＝コアウイラ州境のラグーナ地区に拡大した。マデロ革命で功績のあったエミリオ・カンパヤ

ベンハミン・アルグメドも数千の兵を連れてオロスコに加わった。マデロは反乱が勢いづく前に殲滅するため、彼の血縁者で国防相ホセ・ゴンザレス・サラスを遠征させた。両軍はチワワ州レヤノ村での数時間に及ぶ小競り合いの後、エミリオ・カンパは巧みな作戦を考えた。機関車にダイナマイトを搭載し、連邦軍の列車に向かって前進させた。大爆発で数百人が死傷し、パニック状態になった連邦軍は狂ったように潰走した。ゴンザレス・サラスは敗戦の屈辱に耐えかねて、自らの命を絶った。⁹⁴

オロスコ軍は日に日に勢力を増し、メキシコ市への進軍を叫んだ。オロスコは急進的なバスケス・ゴメスと手を切った。しかしオロスコの前には障害が立ちほだかり、オロスコ軍の南進を阻んだ。それはタフト大統領が厳しい武器弾薬の輸出禁止令を布いたことであった。チワワに広大な土地を持つウイリアム・ランドーフ・ハースト、新しくニューメキシコの上院議員に選ばれたアルバート・ベーコン・フォールは強力なロビー活動を行い、米国の軍事介入を促したが、タフトは乗らなかった。⁹⁵

米国大使ヘンリー・レーン・ウイルソンは過剰に反応し、米国政府にアメリカ人難民の救助を要請した。国務省は疑問に思いつつも、艦船ビューフォードをシナロア沖に派遣した。無政府状態の国から脱出しようとしたのは僅か十八名に過ぎなかった。⁹⁶

オロスコはコアウイラ州トレオンを狙った。この豊かな町の連邦軍守備隊は戦意がなく、武器弾薬も期待できた。成功すれば経済的、心理的効果は大きかった。しかし、思わぬ障害となったのはパンチョ・ビヤであった。ビヤはそれまでマデロ政府にとり、寧ろ重荷になっていた。多くの中産階級がオロスコに走る中、ビヤの兵士には脱走者が相次ぎ、彼の軍は僅か六十人になっていた。三月の終わり、パラルはチワワで唯一マデロに忠誠を保ち続けた町であった。住民の大部分がマデロ、ゴンザレス支持者であったため、守備隊長でビヤのライバル、ホセ・デ・ラ・ルス・ソトはあからさまにオロスコを支持出来ないうでいた。数週間迷っていたが、オロスコが勝利を重ねチワワの殆どを支配するに到り、終に謀反人の支持に回った。パラル駐屯兵全てがソトに同調したわけではなかった。このことを知ったビヤは自分の勢力を回復する好機ととらえ、六十人の男たちを連れてパラルの町に潜り込んだ。ソトに従わなかった指導者の一人マクロピオ・エレラの一団と組み、ソトを難なく逮捕した。皆の予想に反し、ビヤはその場で射殺せず、ソトはメキシコ市へ送られ、マデロによって投獄された。⁹⁷

ビヤはパラルで武器弾薬を見付け次第没収し、裕福な者から総額十五万ペソを強制借用し、連邦政府が勝利したら返済する事を確約した借用書を渡した。出し渋った者は同意が得られるまで留置所に入れた。エンリケ・クレエルと弟フアンの所有するバンコ・ミネロの支配人を脅し、五万ペソを抛出させたビヤは、戦利品で返済義務はないと書いた領収書を渡した。⁹⁸

オロスコのジェネラル・ホセ・イネス・サラサールの指揮する、はるかに優勢な部隊がパラルに向かっていった。ビヤは退いてゲリラ戦を行うか、南方にいた連邦軍に加わる事は

出来たが踏み止まった。大方の予想に反し四月二日、サラサール軍は敗退した。二日後、二千五百のオロスコ軍がパラルを包囲した。劣勢のビヤ軍は、それ以上止めることが出来ずパラルをオロスコに渡し、夜陰にまぎれて撤退した。99

規律あるビヤ軍と対照的に、オロスコ軍は乱暴狼藉の限りを尽くしてテロリストと化した。ジェネラル・サラサールは完全に部下のコントロールを失っていた。パラルの四分の一の住民が避難した。オロスコによるパラル略奪のニュースはたちまち全チワワに広まり、オロスコの人気は下降に転じた。連邦軍が対応に手間取っている間に、オロスコがトレオンへ急展開するのをパラルで食い止め、貴重な時間を稼いだことは、ビヤの偉大な功績であったとゴンザレスは後々まで称えた。マデロはビヤの忠誠心と予期しなかった彼の軍事的成果に深い感銘を受けた。マデロはビヤに礼状を書くと同時に、独立した軍の指導者を返上し、オロスコに決戦を挑もうとしている連邦軍ジェネラル、ビクトリアノ・ウエルタの下で力を存分に発揮する事を求めた。連邦軍のみでオロスコと戦えばディアスの二の舞になると心配したマデロは、チワワの事情に明るい元革命戦士との共闘政策を打ち出していた。革命戦士にしてみれば、勝利者が敗者である連邦軍指揮官の下に入ることは屈辱であった。フアレス条約締結後、サパティスタ大虐殺やプエブラのスポーツ・スタジアムでの革命家殺害などを犯し、良心の呵責など全く感じていない連邦軍を、彼等は全く信用していなかった。連邦軍と革命部隊が共同でオロスコと戦っている間、連邦軍指揮官はあらゆる手段で元革命軍を弱体化しようと、彼らの部隊を解隊して政府軍部隊に分散して吸収し、あるときは危険な戦闘の最前線に立たせた。100

ビクトリアノ・ウエルタの出身地はナヤリット州とハリスコ州とする二つの説がある。彼は純血のウィチョル・インディアンで、日干し煉瓦造りの家に生まれ、貧しい一生を過ごすはずであったが、ある日、たまたま村を通りかかったジェネラルに拾われた。そのジェネラルの導きにより、やがて有名な士官学校へ入学して軍人としての道を歩むことになった。国民の間では「血に飢えたアニマル」と呼ばれる一方、外国の外交官は一致して、勇敢であり悲劇的なほどに誤解された男と評した。彼は若いときには地酒ブルケを、階級が上るに連れてブランディーを強飲したが、放蕩にふけるようなことはなく、酒がはいるにつれ頭脳が明晰になったという。彼は無口で滅多に喋らず、いつも無表情で薄い唇を固く閉ざし、冷たく射すような黒い目で真っ直ぐ前を見詰めた。ウエルタは頑強な意志を持ち、恐れを知らず、無慈悲であった。彼は鬪鶏を見るときも、前線で死と直面しているときも、議会に臨んでいるときも、酒を飲んでいるときも、閣僚とお茶を飲んで談笑しているときも、常に同じ表情をしていた。101

ビクトリアノ・ウエルタの当面の政治課題は、マデロに反対し、支配層と手を結び、アブラム・ゴンザレスを知事から引きずり落すことであった。ビヤが部下を引き連れてウエルタ軍に加わったとき、ビヤは虎穴に入ろうとは夢にも思わなかった。最初、両者の関係は友好的であった。ウエルタの目にはビヤは山賊以外の何者でもなく、金でビヤの忠誠心を

買えるぐらいに思っていた。マデロはビヤに名誉ジェネラルのタイトルを与えたが、ウエルタの指揮官たちは彼を蔑み、事あるごとに擲擄した。102

五月の初め、ウエルタはビヤのトマス・ウルピナ中尉の逮捕を命じた。ウルピナが英国人の所有する大農園を襲い、馬や武器を徴集したうえ、従業員を脅して千五百ペソを脅し取ったのが理由であった。これについて米国大使ヘンリー・レーン・ウイilsonからの抗議を受けたウエルタはウルピナを逮捕し、直ちに処刑することを約束した。ウルピナは逮捕されたが、ビヤと革命軍指導者たちはウルピナを処刑すれば北部師団を引き上げると反対した。オロスコ討伐に革命軍を必要としたウエルタは、処刑することが出来ず、ウルピナをビヤに引き渡した。ウエルタはこの屈辱を忘れなかった。それ以後ウエルタは事あるごとにビヤに嫌がらせをした。103

五月、ウエルタの北部師団はオロスコを二度にわたって破っていた。六月三日、ビヤはウエルタに電報を送り、彼と北部師団の除隊を申し入れた。当時は戦闘が進行中以外は自由に除隊が行われていた。オロスコに勝利して、連邦軍は既に自分たちを必要としないだろうとビヤは考えていたと思われる。ウエルタはビヤを抹殺する又とない好機と捉え、彼の将校ギエルモ・ルピオ・ナバレッテにその仕事を命じた。「ビヤが謀反を起したとの報告があった。必要な兵を連れて彼の本営を襲へ、一人も生かすな」であった。幸運にもナバレッテは血に飢えた将校ではなく、ビヤの敵でもなかった。ナバレッテは激しい抵抗があるものと予期していたが、ビヤと部下の兵士は眠っていて、反乱の様子は全く見られなかった。このような状況下で攻撃を加えるべきではないと判断したナバレッテは、再度ウエルタからの指示を仰ぐため引き返した。数百人を処刑することなど朝飯前のウエルタは、結果を待つまでもなく既に寝込んでいた。翌朝目を覚ましたビヤは、連邦軍に取り巻かれているのを見て、一人で本営の電信室へ行き、マデロに除隊を申し入れ、武装解除でもなんでも、マデロの指示に従うことを打電した。無防備のまま本営に行ったビヤはその場で逮捕された。ウエルタはビヤに話をすることなく、軍法会議にもかけず、処刑を命じた。ビヤはライフルを持って並んだ銃殺隊の前に身を投げ出し、すすり泣き、命乞いをした。銃殺隊が銃口をむけているところを、ルピオ・ナバレッテが介入し、再びビヤの命を救った。ウエルタは命令に背いたルピオ・ナバレッテを脅した。彼は口を開き、ビヤに謀反の気配は見られなかったと反論すると、ウエルタの態度は変わった。ウエルタが処刑を取りやめたのは、マデロから助命の電報が既に入っていたためと思われる。104

ウエルタはビヤにエスコートを付け、投獄するためメキシコ市へ送る一方、北部師団を連邦軍に編入した。ビヤを生きてメキシコ市へ到着させないよう、途中脱走を企てたとして射殺を計画したウエルタは、トレオン守備隊長フスティニアノ・ゴメスに実行を命じた。ゴメスは上官であるジェネラル・ゲロニモ・トゥレビニョに相談したところ、上官はウエルタの命令を撤回させた。ウエルタは諦めず、列車が経由するサン・ルイス・ポトシの守備隊長に処刑を命じた。しかし、この隊長もメキシコ市の本営に指示を仰いだ結果、ビヤを

メキシコ市へ送ることにした。105

84. Enrique Krauze, "Mexico, Biography of Power, a History of Modern Mexico, 1910-1996, 1997, P264
85. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P130
86. Ibid. P131
87. Ibid. P135
88. Ibid. P139
89. Ibid. P140
90. Ibid. P150
91. Ibid. P151
92. Ibid. P152
93. Ibid. P153
94. Ibid. P156
95. Ibid. P157
96. Enrique Krauze, "Mexico, Biography of Power, a History of Modern Mexico, 1910-1996, 1997, P266
97. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P158
98. Ibid. P159
99. Ibid. P160
100. Ibid. P162
101. Eileen Weisome, "The General and Jaguar", Little Brown and Co., 2006, P27
102. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P163
103. Ibid. P164
104. Ibid. P165
105. Ibid. P166